

【オリエンタルコンサルタンツ・インディア社長 阿部玲子氏 インドでの取り組みは？安全・品質を根付かせる】

そこが聞きたい

インド駐在歴は約8年となる。これまでに2007年から10年までデリー首都圏を走るデリー・メトロでトンネルエンジニア、10年から13年までバンガロール・メトロで品質管理主任などに従事した。13年9月からことし3月までは博士号を取得するため日本にいったん帰国。テーマは

ACKグループ(ACKG)が、オリエンタルコンサルタンツの海外事業部門を分社化・独立させ、10月1日から事業開始したオリエンタルコンサルタンツグローバル。そのアジア地域現地法人の一つ、オリエンタルコンサルタンツ・インディアの社長に阿部玲子氏が同日付で就いた。同グループ会社では初の女性社長となる。「インドの地に根付いた事業を展開できれば」と抱負を語る。急激な経済発展を支えるインフラ整備に向けて、これまで得た知識と経験、技術を生かしながら、手腕をふるっていく。



オリエンタルコンサルタンツ・インディア社長 阿部 玲子氏

インドでの取り組みは？

『発展途上国における工事現場の環境向上について』とした。『発展途上国の人は技術の習得には貪欲だ。しかし、安全と環境の向上は、お金と時間がかかる上に、目には見えない。事故が起こって初めて気が付くため、どうしてもおろそかになってしまっている。安全と環境を発展途上国で根付かせることが、「エンジニアにとって戦い」と強調する。

安全・品質を根付かせる

当然宣伝してほしい」と期待する一方で、「われわれのようなエンジニアもドボジョ。管理者側も目指してほしい」と訴える。

もともと英国の植民地だったという歴史的な背景もあって、インドは鉄道を大事しており、鉄道網も発達している。特に地下鉄には「先進国に並ぶというイメージ」を持っており、象徴的な国家プロジェクトという。

たことが大きく奏功した」と胸を張る。これからは、地下鉄建設事業を大きな柱にしつつ、首都ニューデリーと商都ムンバイ間の約1500キロメートルを結ぶインド高速貨物鉄道、日本政府が導入を目指す新幹線の建設などで、「品質、安全、工程など管理能力を仕事を通じて伝えていくのが役目」と見据え、日本の高度なマネジメント技術の拡大に意欲を示す。

大学、大学院では、トンネル工学を専攻。その後、ゼネコンに入社したものの、当時はトンネル工事現場に女性は入ることがタブー視されていたことから、キャリアアップのため、ノルウェーに留学。転職を経て、オリエンタルコンサルタンツに。

「海外で仕事をするために必要なのは学歴と略歴。性別や肌の色による区別はない。日本の女性エンジニアにとって絶好の機会だ」と、志のある後輩にエールを送る。

対する意識など、日本とインドの文化、慣習の違いには戸惑うことも。現場で発生したトラブルをすべて「ノープロブレム」(問題ない)で済ませる風土に、「毎日が『日本新喜劇』だった」と笑顔で話すものの苦労は多かったはずだ。それでもデリー・メトロは、予定の工期内に完成させ、「デリー・メトロ公社とわれわれコンサルタントグループ、日本のゼネコンが率先して工期を守ることを徹底し

「あへ、れい」 2008年オリエンタルコンサルタンツ入社。09年GC事業本部軌道交通部次長、12年同部長、14年10月からオリエンタルコンサルタンツ・インディア取締役社長兼オリエンタルコンサルタンツグローバル軌道交通部部長。山口県出身、51歳。